

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00446

研究課題名(和文) 20世紀ドイツ児童文学における「おじさん」表象の変遷についての研究

研究課題名(英文) A Study on the changing Representation of the Uncle in the 20th Century German Children's and Youth Literature

研究代表者

佐藤 文彦 (Sato, Fumihiko)

金沢大学・GS教育系・准教授

研究者番号：30452098

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では20世紀ドイツ児童文学に描かれた「おじさん」表象の分析を通じて、近代家族制度の変遷とその多様化の実態について考察した。その結果、父権の失墜あるいは父親不在という現実を背景に、ベルリンを中心に展開された両大戦間期の都市型児童文学において初めて自由で陽気な「おじさん」的人物が活躍したことを突き止めた。この「おじさん」的存在はナチス政権下においてふたたび強い父親像に取って代わられるが、今日的観点からは戦後の多様な家族のあり方のさきがけとして位置付けられることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの成長にとって「おじさん」的人物が果たす役割に着目した本研究の社会的意義は、近代市民社会において絶対視されてきた両親と子から成る聖家族モデルの相対化を促し、多様な家族のあり方を肯定するドイツ児童文学の紹介と普及を行ったことである。その起点を本研究は両大戦間期に求めたが、その結果、ドイツ本国では忘れられ、わが国ではこれまで知られることのなかったエーリヒ・ケストナー以外の両大戦間期ドイツ児童文学の作家・作品の発掘につながった。家族をめぐる近現代ドイツ児童文学史研究の空白を埋めることができたことは、本研究成果の学術的意義として挙げられよう。

研究成果の概要(英文)：Through the analysis of the "uncle"-figure depicted in the German children's and youth literature of the 20th century this study considers the changes in the modern family and its diversifications. Consequently, it was proven that against the backdrop of the loss of paternal authority or the absence of fathers for the first time a liberal and cheerful "uncle"-figure played an active role in the growth and development of children in the Berlin-centered urban children's and youth literature during the inter-war period. Under the Nazi regime, the "uncle" was again replaced by a strong father-figure, but from a contemporary perspective, he could be confirmed in his positioning as the forerunner of the diversity seen in postwar families.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学 児童文学 おじさん・おばさん

### 1. 研究開始当初の背景

両大戦間期ドイツ児童文学への関心は、2012年にペーター・ラング社から2巻本の論集 *Die Kinder- und Jugendliteratur in der Zeit der Weimarer Republik* が刊行されたように、近年ドイツ本国においてかつてない高まりを見せている。しかしこの最新かつ多様な取り組みに対するわが国のドイツ文学研究者らの反応はすこぶる鈍い。本研究代表者はかつて両大戦間期ドイツ児童文学に描かれた都市ベルリンの表象研究に取り組んだが、その際、都市インフラの整備や経済の悪化など、大人の社会の現象を重視するあまり、子どもの世界固有の傾向を看過してしまった反省があった。両大戦間期ドイツの子どもにとってもっとも特徴的な傾向とは、母子家庭の増加あるいは父親不在の家庭環境である。

第一次世界大戦による戦争孤児の増加によって父親不在の児童文学の創作が促されたという点は、Birte Tost が2005年の研究で指摘した通りである。さらにTostは父親不在の児童文学には「よきおじ」が頻繁に登場し、子どもの成長を手助けする傾向がある点に着目し、ワイマール共和国期の児童文学では旧来の権威主義的父親像は解体されたと結論付けた。そもそも近代市民社会の成立と近代家族の誕生は「子ども」という概念を発見したが、その際に前近代から引き継いだマッチョな父親像は19世紀を通じて巧妙に維持され、子どもが社会化する際の規範として機能し続けた歴史的経緯を忘れてはなるまい。英米児童文学では19世紀末に孤児文学が流行したが、ドイツ児童文学が本格的に孤児または父親不在の問題と取り組み始めるのは、20世紀初頭に勃発した第一次世界大戦という時代状況を経てからのことである。

以上のような学術動向を背景に、本研究代表者は児童文学作品を通して展開された20世紀ドイツの世代間、とりわけ父子間対話の分析と解明という大きな問いを立てた。そしてその際に「おじさん」に代表される父とは異なる成人男性が子どもの成長過程で果たした役割を探ることで、旧来の父親像の変化と多様化の実態を複眼的に位置付けられ得るという仮説を立てた。本研究はTostの先行研究を精緻化すると同時に、考察の範囲を両大戦間期に絞らずその前後(帝政期から東西分裂を経て、再統一後まで)も含む形で幅広く設定することによって、近現代ドイツ児童文学における「おじさん」表象についてより包括的かつ総合的な成果をあげることを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は第一次世界大戦後に生じた父親不在という現実を背景に、父とは異なる成人男性、いわゆる「おじさん」的存在が登場・活躍する20世紀ドイツ児童文学の代表的作品の分析を通じて、父子関係に代わる「おじさんと甥・姪関係」の変遷の諸相を明らかにすることにある。そのことによって20世紀の児童文学は父権を基盤に形成された家父長制や近代家族のあり方を相対化し、多様な家族・家庭の姿を提示するメディアたり得るかという、この文学ジャンルに課せられた今日的課題について再検討を試みた。

こういった独自の研究目的を掲げるに至った背景として次の二点が挙げられる。ひとつはワイマール共和国期の児童文学に限定されていたTost(2005)の「よきおじ」研究を20世紀全体に敷衍した点、もうひとつはドイツ現代史における家族の変遷を検証する上で、フィクションとしての子どもの視点に着目した点である。本研究が考察の対象とした作品および作家は今日必ずしもメジャーなものとは限らない。本研究はマイナー・ポエットへの目配りを綿密に行うことで、家族をめぐる近現代ドイツ児童文学研究史の空白を埋めることもまた目指した。

研究代表者はこれまでワイマール共和国期のプロレタリア革命童話から戦後東ドイツの社会主義児童文学に至る政治的児童文学を体系的に把握する一方、それらの文学の主要舞台である都市ベルリンの表象研究にも取り組んできた。20世紀ドイツ児童文学の思想的・空間的背景を整理した上で「家族」という親密圏をテーマに選定した本研究は、孤児文学がジャンルとして定着している英語圏の児童文学研究をドイツ語圏のそれに援用するという方法論的な戦略に基づいて計画されたものでもあった。たしかに国民国家およびその母体である市民社会の形成過程は欧米でも国によって大きく異なるが、近代家族の中心である親子関係、とくに父子関係を「おじさんと甥・姪」関係との相関において考察する本研究は、児童文学研究と比較文学研究の融合という、研究手法上の目的もまた有していたのである。

### 3. 研究の方法

文献学に基づいた作家・作品研究であるため、主たる方法としてはテキストを読み込む内在解釈を採用した。しかし本研究代表者の過去の研究を通じて収集済みの両大戦間期および東ドイツの児童文学作品(一次文献)を除き、とくに帝政ドイツ時代と西ドイツ、再統一後の児童文学を体系的に所蔵する機関が国内には存在しないため、研究の予備的作業として、資料の体系的および集中的な収集とその整理に取り組んだ。

収集・整理された一次文献については、当然のことながら精読および分析（テキスト内在解釈）を行った。ただし文学作品に描かれた家族関係に焦点を当てた本研究においては、家族社会学や歴史学の研究成果も積極的に援用された。さらには20世紀の「父なき社会」論を展開したポール・フェダーンおよびアレクサンダー・ミッチャーリヒの精神分析学、母系社会だけでなく父系社会にも残存するアヴァンキュレート、すなわち母の兄弟と妹の息子の関係について考察した文化人類学の先行研究も大いに活用された。そのことが契機となり、山田洋次監督の映画「男はつらいよ」シリーズの主人公・車寅次郎とドイツ児童文学に描かれた「旅するおじさん」表象を比較した際には、メディア横断型の比較文学の研究方法を取り入れた。

また、研究開始当初は想定していなかったが、ジェンダー学を扱う国際シンポジウムの中で現代日本の漫画『弟の夫』（2015-2017）に描かれたおじと姪の関係について発表する機会があった。この発表で扱った作品は本研究が考察の対象とする20世紀ドイツ児童文学とは直接的には関係しないが、日本映画「男はつらいよ」へのアプローチ同様、（日独）比較文学研究に取り組む際には漫画もまた考察の対象になり得ることが確認できた点で、本研究課題に用いた方法として最後に書き残しておきたい。

#### 4. 研究成果

本研究によって得られた最大の成果は、これまでわが国のドイツ文学・児童文学研究において顧みられることの少なかった作家の作品、とくにケストナー世代の両大戦間期ドイツ児童文学に描かれたさまざまな「おじさんと甥・姪関係」あるいは父子関係について考察することで、19世紀型の近代市民社会では絶対視されてきた両親と子から成る聖家族モデルを相対化し、21世紀にもつながる多様な家族形態を肯定する態度を20世紀のドイツ児童文学に見出すことができた点にある。母子家庭や父親が失職中の共産主義の一家など、こういった家族のあり方はナチス時代の児童文学ではふたたびすぐに描かれなくなる。したがって第一次世界大戦後に誕生した新しい家族像が、その後のドイツ児童文学において連綿と受け継がれたとは言い難い。次にドイツ語圏で父権の弱い家族が注目されるのは、1970年代まで待たなければいけないからである。とはいえ両大戦間期につかの間、戦後の多様な家族のあり方を先取りする形で描かれた父なき家庭とそこに登場する「おじさん」的存在は、子どもの成長に与えるインパクトという点で看過できないものがある。こういった本研究の成果は最終年度（令和4年度）に学術書『聖家族の終焉とおじさんの逆襲』としてまとめられた。以下ではそこに記された主だった点を概観する。

（1）両大戦間期ドイツ児童文学で活躍する「おじさん」の最大の特徴は、彼らが旅人である（あった）ということである。そのことは子育てを含めた日常あるいは責任に縛られる父親と好対照をなす。旅を通じて蓄えた「おじさん」の財産とは、非日常的な経験の豊かさ、非日常的な旅の時間感覚であり、そこに子どもは憧れる。本研究ではこういった特徴を有する「旅するおじさん」像を多数の知られざる作品から導いて指摘した。その中にはケストナーの『五月三日』（1931）も含まれる。「おじさん」をだらしのない人物に設定し、子どもとともに空想世界を旅させることで、「おじさん」が弱い大人でいる勇氣、強くなくてもよい生き方を身をもって提示した点に、ケストナーの「おじさん」像の独自性が見出される。「旅するおじさん文学」という観点からケストナーを両大戦間期ドイツ児童文学史に位置付け直したことは、本研究の成果として特筆するに値しよう。なお、本研究代表者の見解では、この時代のドイツ児童文学に描かれた「旅するおじさん」は必ずしも血縁に限定されない。

（2）血縁ではない「おじさん」像は同時代のプロレタリア児童文学にも見出される。ウェディング『エドとウルク』（1931）では、失業によって父権を失った父に代わり、主人公の少年は複数の他人の「おじさん」と会うことで成長を遂げる。具体的には、共産党員である友人の父やロマの大家族の一員である成人男性と交流することで、父親とは別の生き方を模索するようになるのである。

（3）「おじさん」そのものからは外れるが、本研究では両親と子から成る聖家族モデルの崩壊を裏付けるべく、両大戦間期ドイツ児童文学におけるロマの子あるいは家族の表象についての分析も試みた。ボヘミアの収容所を脱走し、ドイツ人夫妻と疑似家族を演じる少年や、母系の大家族とともにベルリン郊外に居住車で暮らす少女、フランス語環境で生育したため、ドイツ語を話す実父とのコミュニケーションに苦労しながらも、彼と移動生活を続ける少女など、ロマの子の生態はドイツ人の子のそれと大きく異なる。にもかかわらず両者は交流し、親世代の差別や偏見を克服しようとする。ドイツでも日本でも、ほとんど先行研究のないこれらの作品と取り組み、その文学史的価値や意義について論じた点は、本研究の重要な成果のひとつである。

（4）19世紀以来、ドイツ語圏においてクリスマスは近代市民家族の象徴的祝祭だった。それがもはや両大戦間期には、近代市民家族の限界を象徴するイベントに変容したことを、本研究では父権の失墜と関連付けて指摘した。ケストナー『飛ぶ教室』とシュナック『おもちゃ屋のクリック』は、ともに1933年に出版されたクリスマス児童文学である。ナチスが政権を掌握した年に

現れたこれらの作品では、真夏のクリスマスという皮肉ないしは逆説について言及されている。家庭にクリスマスツリーすらない貧困層のクリスマスを描いた作品の分析を通じて、19世紀型近代市民家族が機能不全に陥った様を跡付けた結果、この現象は21世紀の現代にもつながるといことがわかった。

(5)すでに述べた通り、ナチス時代のドイツ児童文学では「おじさん」の出番はなくなり、強い父親像が復活する。本研究においても、1930年代初頭に書かれた5つの少女小説と、1930年代半ばから後半に書かれた3つの少女小説を取り上げて分析を行った結果、前者の作品群では「おじさん」が少女と積極的に交流するのに対し(この事実と並行して、これら5作品すべてに父親は登場しない)後者の作品群では亡き父が理想化されたり、都会的な実父を否定し、田舎で労働奉仕することによって父の国への思いを強めていく傾向が顕著に見られた。なお、本研究が扱った少女小説はすべて邦訳がなく、わが国においては先行研究も皆無であるため、研究史の空白を埋めた学術的意義は大きい。

最後にこれらの研究成果を発展させ、今後のさらなる研究に結び付ける展望について簡単に述べたい。本研究の開始当初は、もっぱら「旅するおじさん」と甥あるいは少年の関係について考察していたが、上述の(5)で述べた通り、徐々に「おじさん」と姪あるいは少女の関係へと対象が移行していった。その結果、ナチスによる政権掌握以前と以後では、当然のことながら両者の関係の描写に大きな隔たりがあることに気づいた。加えて「おじさん」と少女の関係が希薄になるにつれ、父と娘の関係が全面に現れることも明らかになった。近代性や都市性を体現していたおじさんに代わり、従軍経験のある、農業に従事する父親像をクローズアップするナチス時代の少女小説の背景には、ヒトラー政権が喧伝した家父長的家族像がたしかに控えている。そういった保守的復古的な家族像は19世紀型の近代市民家族と何が違うのか、両大戦間期の少女小説から何を継承し、何が変容されたのかなど、ナチス時代の少女小説の実態についてはいまだ明らかにされていないことがあまりに多い。本研究の次に取り組む課題として、研究代表者は今度は「おじさん」ではなく父娘関係を背景に、ナチス少女文学の成立と展開についての研究を掲げた。そしてこの新たな研究課題は、令和4年度に基盤研究(C)として科研費の採択を受けた(課題番号22K00446)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐藤文彦	4. 巻 18
2. 論文標題 旅するおじさん文学として読むケストナー『5月35日』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本独文学会北陸支部 ドイツ語文化圏研究	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤文彦	4. 巻 14
2. 論文標題 季節はずれのクリスマス 1933年ドイツのふたつのクリスマス児童文学について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 13-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤文彦	4. 巻 13
2. 論文標題 父なき家庭の母娘あるいはおばさん文学の（不）可能性 1930年代初頭のドイツ少女文学について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤文彦	4. 巻 12
2. 論文標題 旅するおじさんの文学 1930年代前半のドイツ児童文学を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 17～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤文彦	4. 巻 40
2. 論文標題 両大戦間期ベルリン児童文学に描かれた移動する子どもたち	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪市立大学ドイツ文学会『Seminarium』	6. 最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤文彦	4. 巻 11
2. 論文標題 おじさん文学論に向けて ドイツ語圏における研究史と20世紀初頭の児童文学を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 佐藤文彦
2. 発表標題 父の世界を継ぐ娘 ナチス少女文学が生まれるとき
3. 学会等名 阪神ドイツ文学会第235回研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤文彦
2. 発表標題 Reading the Manga "My Brother's Husband" with Regard to the Uncle's Function in Literature
3. 学会等名 金沢大学・デュッセルドルフ大学国際共同シンポジウム「Frontier of Gender Studiesジェンダー学の最前線」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤文彦
2. 発表標題 おじさん文学論に向けて ドイツ語圏における研究史と20世紀初頭の児童文学を中心に
3. 学会等名 日本独文学会北陸支部2018年度研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤文彦
2. 発表標題 旅するおじさんの文学 1930年代前半のドイツ児童文学を中心に
3. 学会等名 金沢大学人文学類シンポジウム「<旅>と文学」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤 文彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 聖家族の終焉とおじさんの逆襲	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関